



2016・6・7

**SORA** 67号

福岡 栗原京子

のどけしや旅人に猫すり寄りて

山桜ふるさと出でぬ古仏

発掘の作業小屋の辺南瓜蒔く

子の丈を越えて消えゆくしやぼん玉

密教の梵字の綴り梅雨に入る

京都 天谷翔子

桜餅草餅雨の日曜日

膝折つて読む入園の子の名札

表より裏地華やか春コート

憲法記念日ゴミ袋にも名前

亀鳴けりノアの方舟より落ちて

大阪 青木朋子

山笑ふ近づいて来る関ヶ原

木々芽吹く草津の宿に投函す

照らされて深まる老や夜の桜

段丘の墓群囲める桜かな

土間広き友の家なり桃の花

大阪 井上和子

切株の年輪蒼む朝桜

菩提樹の葉のつやつやと鳥の恋

水煙に天女の舞ひや花の冷

老鶯や鑑真和上の身代り像

秋篠の寺の辺りの溝浚へ

長崎 松尾龍之介

清明や老いて小さき奥目となる

いにしへの絹の道より蒙古風

黒松のをとこ踊りや花の山

わが御世で終はる灯台春おぼろ

空きカンの轆かれ熨されし春の暮

大阪 田岡千章

啓蟄を裏返したる植木鉢

水温む若狭井以て二月堂

水温むまた道草のランドセル

母と子の似顔絵遊び夕長し

飯蛸のこまつしやくれて茹で上る

北九州 河原敬子

やはらかきものに触れたし春の月

花筵被りて雨を遣り過す

境内は子らの遊び場揚雲雀

山吹の道あいさつを交はしゆく

夏はじめ子の心配はせぬことに

大宰府 西住三恵子

砂時計音なく刻む春夕日

春筍や狼籍しるき猪ぬた場

めまとひを片手払ひに読む碑文

ひたすらに祈る他なき春の地震

夏帽子とりて募金と署名せり

東京 遠山のり子

寄せ書きに夢をいつぱい卒業す

桜葉降る園丁の肩に背に

青嵐山頂白き富士の見ゆ

谷川に石ごろごろと鳥帰る

屋根覆ひゆるる大木夏来たる

東京 今井春生

啓蟄や昨日とどこか違ふ庭

若冲の羅漢らと聞く初音かな

芽柳の月に際立つ祇園かな

大鍋の出番筍届きたる

葉桜の風や砂場に子らの声

宮崎 田代民子

をがたまの花散る震度三の揺れ

指に残る夏柑の香のほろ苦き

むらさきを風に放ちて諸葛菜

おとうとへ地震見舞ひの甚平かな

四月尽く一人の熱き湯を落とし

東京 古川夏子

花の昼村に小さき郵便車

芽楓や石積み荒き館址

花なづな貸農園の柵ゆるび

草萌ゆる古墳の上の美術館

母の日の雑踏にゐる上野かな

兵庫 森 俊 人

春霜や鬪病の日々つづきをり  
焼きたてのパン買ふ予後や花辛夷  
春蝶の柱となりて墓碑の前  
鴛鴦の二組のこる日暮かな  
潮の目の交じつてゐたる新学期



空作品抄  
柴田佐知子抽出

足抜けば萎える地下足袋麦の秋

龍天に地に胴鳴りの登り窯

米櫃の米の起伏や夕桜

十葉や母のまなざし父の聲

櫓の音の闇に消えゆく螢川

溝浚へ時計持たざる人ばかり

野遊びの日向大きく使ひけり

囀りや茶柱底に沈みて立つ

けふの白増えてゆくなり袋掛

手に螢止まり身動き出来ぬなり

虎杖の斑のくれなゐや僧の恋

骨のある新入社員来たりけり

弁当が大きくなつて卒業す

原 友子

角 野良生

深 川淑枝

小 林朱夏

永 淵恵子

森 田明成

山 本則男

岸 洋子

中 田みなみ

秋 千晴

吉 田 菫

高 倉和子

織 田高暢



柿の葉鮎夜汽車の窓に星飛べり

人間に整理番号四月馬鹿

突堤の高々とある若布採

乾物は暗がりであり日永し

蛇の衣泳ぐかたち流れゆく

夜の山に桜の道のありにけり

抱きつけば癒ゆる気がする新樹かな

吹く泡は蜩の溜息かも知れぬ

田を植ゑてしづかな村の夕べかな

臥す友の終の投句や鳥雲に

梨の花震へて受粉了りけり

うみてらしピカソの青の水平線

夜桜や昼は正しき通学路

花見ならジャングルジムのてつぺんで

またひとつ御守りの増え樟若葉

歯嚙みして出番逢待てり祭馬

宮井知英

田岡千章

えとう樹里

曾根富久恵

戸栗末廣

石橋幾代

白水良子

田代貞香

栗原京子

林徹也

田中とし江

千波悠

三井所美智子

仲里奈央

古賀真理

田代民子

剃りあとの青き兄の死聖五月

後のこと土筆の袴とりながら

ラムネ売る店ではじまる紙芝居

町中が起きてゐるなり祭笛

夜振火の水を蹴たてて登りけり

酔に弱る白魚に血の透けきたる

春宵の合せ鏡のうなじかな

鉦叩けばすぐ来る渡し日脚伸ぶ

本殿も塀も崩れて花は葉に

花水木咲けば子等来る夫笑ふ

日向ぼこ老いの深さを思ひつつ

七月や光となりて馬走る

卒業や草木はどれもよき名あり

誰よりも高くぶらんこ漕ぎたき子

屋根葺きの往き交ふ空やほととぎす

車椅子の母を藤の香包みけり

田邊 豊子

井上 和子

植田 洋子

亀井 紀子

吉村 摂護

山内 碧

古川 夏子

窪み ち子

横田 敬子

吉田 悦子

田坂 能雄

苑 実耶

森 俊人

遠山 のり子

山口 弘子

岩下 きぬ代



席順は早い者勝ち花筵

漬けものの試食もありて農具市

朧夜の猫に蒲団を縫うてやる

主なき土蔵となりぬ立葵

春ひと日妣の着物をまとひをり

突堤はとつぷりと暮れ春祭

せせらぎの水底まぶし夏はじめ

かくも強き赤子のこぶし麦の秋

路地ごとに恵比須祀りて風薫る

騒立てる川を宥めて鳥雲に

読経みな瀑音となる那智の滝

荒々とバレンむびかせ山車渡る

ぜんまいの不思議の渦に迷ひ込む

植ゑくれし人のことなど八重桜

挨拶をして通る子やさくらんぼ

夕暮の蒼き島影花こぶし

荻 悠子

あさなが捷

青木朋子

野畑さゆり

村上典子

天谷翔子

石川 叔子

本多トミ

西住三恵子

押田裕見子

田口萬智子

日 高 孝

今井春生

岡村尚子

村上二三

小島翠波



藤の花娘に同居すすめられ

名札とは違ふ色咲くフリージア

割烹着つけて煮炊きや宵祭

新しき蹄鉄を履く春の駒

いつまでも咲いているよと胡蝶蘭

風薫る風車の村でチーズ買ひ

白昼夢掴めば消ゆるしやぼん玉

若者の物知り顔や半夏生

歩を速めやがて息切れ鯉幟

ふるさとや鹿よけ光る蜜柑山

雨さつと過ぎし竹山夏料理

ふじの茜

岩井京子

立花一枝

桐山甫

三輪敏夫

清水量子

山田正子

わたなへ漣

田中素直

後藤園子

森真二

# 空作品評

柴田佐知子

溝浚へ時計持たざる人ばかり

森田 明成

足抜けば萎える地下足袋麦の秋

原 友子

叔母について畑や蜜柑山について行ったことを思い出す。地下足袋を履いた叔母は、石伝いに小流れを軽々と跳んで越え、ぬかるんだ道も楽々と歩いていった。掲句は仕事を終えて、小鉤をはずして脱いたばかりの地下足袋の描写。ぴつたりと張り付いて足と一体化していた地下足袋から「足ぬけば」、くたりと魂が抜けたような姿へと変わる。「萎える」という言葉の選択が見事だ。田圃の広がり力が呼び込む「麦の秋」も効果的。

人間に整理番号四月馬鹿

田岡 千章

米櫃の米の起伏や夕桜

深川 淑枝

米櫃の中の「米の起伏」をうつとりと見るときがある。「米の起伏」の穏やかな静けさは古より命の糧として繋いできた原初的恵みの静寂であろう。米櫃の中という小さな空間がはるかな世界に誘う。「米の起伏」が「夕桜」の大八洲の起伏へとひろがってゆく美しい作品である。

「溝浚へ」は、田植前に用水の流れをよくするため、堰の修理や田の溝を濶うこと。都市でも害虫や悪臭を除くため、路傍や溝を掃除する。掲句はサラリーマンも参加できる休日かもしれない。「時計持たざる人ばかり」によつて、町内の溝浚いの雰囲気伝わってくる。時計に焦点を定めたことでリアルな景が立ち上がってくる。

尚、水が少ない冬季に池や川の修理をする。これは「川普請」「堰普請」「池普請」などと言ひ冬の季語である。

区役所や銀行ではまず整理券を取らなくてはならない。順番が来ると番号で呼ばれる。昔は番号で呼ばれるのは囚人とか捕虜だったのでないだろうか。慣れきつてしまっていたが、このように詠まれると今更ながらの驚きがある。「四月馬鹿」に作者のシニカルな視線がある。

# 空集

柴田佐知子選



竜宮の華やぎにあり桜鯛

芳一の耳のゆくへや花篝

仏舎利の一ひらならむ桜貝

耳といふ奇妙なかたち春の雲

所狭しと本置く机あたたかし

米櫃の米の起伏や夕桜

茎の石少し軽くす遠嶺晴

春雷や柱の罅の地まで延ぶ

帯低く結ぶ齡や糸桜

切株の木の名忘れ風光る

人遠く雲遠く春惜しみある

犬待たせ涅槃寺へと上がり込む

船を置く水平線より卯波来る

十葉や母のまなざし父の聲

螢火や声を上ぐれば消えさうで

気晴らしに買ひし水着をすぐ仕舞ふ

草刈つて灘よりの風定まれり

茎立や叩きて落とす膝の土

足抜けば萎える地下足袋麦の秋

半畳の青もて炬燵寒ぎけり

産声の高まり来たるみどりの夜

草餅や孫子のいまを目に刻み

われ病めば磨かぬ廊下明易し

母の日や迷はず決めしわが遺影

火は風に風は火となり野火走る

龍天に地に胴鳴りの登り窯

千葉原

友子

福岡 角野

良生

北九州

深川 淑枝

糸島

小林 朱夏